フィールドで見つけました
こわいもの 1

こわい隣人

香港における東南アジアの呪いのイメージ

呪いなんて遠い世界の出来事だと思っていた。民族誌の古典や、あるいはフィクションで読むだけの存在だと。私自身の生活や、あるいは私のフィールドである香港の都市社会とは無縁なものだと思い込んでいた。

小栗宏太 おぐり こうた / 東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程

呪いとの出会い

> 「ゴンタウって聞いたことあるでしょう。それが盛んな地域の出身だっていうから、こわくて解雇したの」

はじまりは突然だった。香港でヘルパー（家政婦）として働く東南アジア出身の女性についてフィールド調査をしていた私は、雇い主である香港人にも聞き取りを行っていた。その最中に、突然、「ゴンタウ」という耳慣れない広東語を聞いたのだ。私が「聞いたことがない」と答えると、タイなどの東南アジアで盛んな呪いのことで、漢字では「降頭」と書くと説明された。相手の食べ物に何かを混入したり、あるいはその人をかたどった人形に針を刺したりして相手を呪う術で、ヘルパーの中にも雇い主に対してそれを使う者がいるのだ、という。

香港では、外国人ヘルパーは雇い主家庭に住み込むことが義務づけられている。全く異なる背景を持つ人々と同居する中で、さまざまな文化的衝突が起こることは予想していたが、そこに呪いが含まれるとは思っていなかった。はじめてこの話を聞いた時も、「まさか、信じられない」というのが第一印象だった。

家庭の悩みを相談するネット掲示板にも、ヘルパーの怪しい持ち物を見つけた雇い主が「ゴンタウだろうか」と尋ねる投稿が散見された。人口750万人程の香港で働く東南アジア出身のヘルパーの数は30万人以上で、おおよそ6世帯に1人が雇用されている比率になる。少なくとも香港の人々にとって、この身近な異郷人が用いるゴンタウの恐怖はある程度リアルなものであるようだった。

東南アジアと呪いのイメージ

この呪いについて調べるために、今度はわたしが人々に「ゴンタウってわかるでしょう？」と尋ねる番になった。しかし、決まって「東南アジアの呪いだろう」という漠然とした言葉が返ってくるばかりだった。実際のところどんな呪いなのかを聞いても判然とせず、具体的な地域名を聞いても、タイ、インドネシア、ベトナム、マレーシアなど東南アジアの国名が羅列されるだけだった。

特にタイで盛んな呪いだというが、香港の外国人ヘルパーの多くはインドネシアやフィリピンの出身者である。先述の雇い主が雇用していたというのも、インドネシアのジャワ島出身の女性だった。なぜジャワ島の女性が、タイの呪いを使うというのだろう。調べてみると、インドネシア出身のヘルパーについての同様の疑惑は、時折新聞などでも報道されていた。

香港で働く外国人ヘルパーは、インドネシアとフィリピンの出身者が大半を占めるが、フィリピン出身者については同種の噂は聞かなかった。英語に堪能なものが多く、大部分がカトリック教徒であるフィリピン人ヘルパーは、香港において、インドネシア出身のヘルパーと比してより「近代的」であると考えられていて、ヘルパーを斡旋する仲介業者の広告でもそのように宣伝されている。インドネシア出身者とフィリピン出身者に対する呪いのイメージの相違は、彼女たちの祖国の実際の文化慣習に由来するものではなく、香港人のそれぞれの土地に対する偏見に関わるものであるのだろう。

聞き取りを進めていると「昔、そんな映画が流行った」という言及に出会った。確かに1980年代から90年代にかけて、香港では「ゴンタウ映画」（降頭片）と呼ばれる東南アジアの呪術を題材にしたホラー映画が多数作られていた。プロットはどれも似たり寄ったりで、香港人男性が東南アジアに出かけ、現地の女性といい関係になるが、結局彼女を捨てて香港に戻る。その後、香港に戻った男性の身体や精神に異常が発生して、彼は

週に1度の休養日である日曜に公園に集まる外国人ヘルパー。日曜の香港の風物詩だ。

インドネシア人ヘルパーの多くはイスラム教徒であり、街中ではヒジャーブ姿の女性の姿も珍しくない。

＊写真はすべて筆者撮影。

郊外の山中にあるタイ寺院の看板。

タイから輸入したお守りを売る専門店。ゲームやDVDなどを売る店舗が多く入る雑居ビルの一角にあった。

ゴンタウをかけられたのだと悟る。男性やその周辺の人物が、その呪いの根源を探し求めるうちに、彼が東南アジアで犯した罪が明らかになる……。

映画だけではなく、過去の新聞を紐解いても、ゴンタウにまつわる怪奇事件が定期的に香港の紙面を賑わせていた。東南アジアへの渡航歴がある人物が香港で不可解な自殺や自傷事件を起こすと、ゴンタウのせいではないかと噂されるのだ。映画でも新聞の実際の報道でも、渡航先はタイやマレー半島が最も多かったが、ベトナムやボルネオなど東南アジアの他地域も含まれている。

このようなメディアにおける描写を通じて、東南アジアは強い「呪い」をもつ場所としてイメージされているようだった。しかし、なぜそもそも東南アジアに対してこのような恐ろしいイメージがあるのだろうか。

近くて遠い隣人

中国には、より古い歴史を持つ「蠱毒（こどく）」という呪いの伝承もある。これは苗族（ミャオ）など雲南や広西といった中国南部の少数民族の女性が使うとされたものだ。この呪いにまつわる物語は、たとえば広東の漢族の男性が旅先の広西の女性と恋に落ち、帰郷後に奇病を発して死亡するというようなもので、ゴンタウの物語とも非常に似かよっている。こうした蠱毒にまつわる伝承は、漢民族の居住地域が拡大し異民族との交流が盛んになるにつれて頻繁に語られるようになったという。

かつての中国の漢族にとっての南部の少数民族地域と同様に、香港にとっての東南アジアも、地理的に隣接し、交流の多い異郷であった。香港は東南アジア各地への華人の送り出しのハブでもあったため、東南アジア諸国に親戚を持つ香港人も珍しくない。また同様に東南アジアからの移住者も多い。近年増加するインドネシアやフィリピン出身のヘルパーもその一例であるが、小規模ながらタイ人やベトナム人のコミュニティも存在している。そもそも東南アジアとの交流が盛んであったからこそ、上述の映画などにみられるような、香港人が東南アジアに渡航してトラブルに遭うプロットがリアリティを持ち得たのだろう。

またゴンタウは、蠱毒と同様に外来のものであり、風水など道教の術とは区別されたものとして想像されている。映画の中には、冒頭にゴンタウについての解説を入れ、実際の東南アジアの民俗に取材したことを示唆したり、呪いが使用されるシーンにテロップを挿入したりするなど、ドキュメンタリーを模した演出も見られる。実際に描写される呪術には荒唐無稽なものも多いが、産褥死した女性の顎から採取する媚薬「プラーイ油」や、早逝した乳幼児を供養し利益を得る「クマーントーン」など、実在するタイの民俗から発想を得たと思われるものもある。また、キョンシー映画で活躍する道士や風水師など、中国社会内部の伝統的な呪術師は、ゴンタウ映画では脇役である。彼らは登場したとしても大抵はゴンタウ使いの圧倒的な力の前になす術もなく敗れるのみであり、ゴンタウが中国の伝統的呪術の力の及ばない、外来の強大な力であることを演出するための負け役である。

地理的に近く、交流も盛んなものの、中華世界とは全く異なる文化を持つ「近くて遠い」東南アジアへの香港の人々の想像力がゴンタウという呪いのイメージを生み出したのだろう。

身近なものになる呪い

そういったゴンタウとみなされる東南アジアの呪術的習慣は、ただおそれられているだけではない。特にタイはある種のパワースポットとして捉えられており、新型コロナウィルス感染症の流行以前はスピリチュアルなご利益を求める人に人気の旅行先であった。またブッダの姿を刻んだお守り「プラクルアン」（仏牌）など、タイの呪物を販売する専門店が香港にもできている。

香港の書店の「通俗文学」のコーナーに並ぶ広東語小説にも、ゴンタウを取り上げたものがある。例えば『おじいちゃんの怪談』（阿公講鬼）というホラー小説には、タイ由来の呪物を購入したことがきっかけで起こるトラブルを扱ったエピソードが複数登場し、クライマックスは道士である「おじいちゃん」と、ライバルであるゴンタウ師との呪術バトルである。またマレーシアで修行をした「ゴンタウ師」が香港のショッピングモール内に相談所を開き、呪いの依頼を受ける『ゴンタウ師の日常』（降頭師之日常）という小説もある。どちらも日本のアニメやマンガの影響も感じさせるポップな作品でありながら、ゴンタウや東南アジアのモチーフを巧みに取り入れている。こうした通俗文学は、伝統的な書き言葉である標準中国語ではなく、口語である広東語で書かれる読み物として若者に人気のジャンルである。ネット上の媒体を中心に発表され、人気作は書籍化もされるほか、近年は専門の月刊誌も刊行されるなど注目を集めている。そうした広東語文学を好む若者たちにとっても、ゴンタウは身近にある力として想像されているのだろう。

ゴンタウが登場する若者向けの読み物。口語である広東語で書かれている。

人と人とが関わる時、そこにはさまざまな疑念や葛藤が生まれる。相手が自分と異なる背景を持つ人であればなおさらだ。香港におけるゴンタウも、そんなありふれた感情と結びついたものなのだろう。そう考えれば、呪いとは、どこか遠い世界の特別な出来事などではなく、思ったよりもすぐそばにあるものなのかもしれない。FP